

ストックホルムでのISO

財団法人 日本塗料検査協会
技術顧問 吉田 豊彦・井関 匠三



写真1 ホテルからガムラスタンを望む

第31回のISO/TC35とそのSC、WGの国際会議が、6月15日から18日まで、ストックホルムのスウェーデン規格協会 (Swedish Standard Institute、略してSIS) で開かれた。この会議の概略を報告しておこう。

スウェーデン、ストックホルム、SIS

スウェーデン (正式にはスウェーデン王国) は第1次、第2次の世界大戦には中立を貫いて、美しい国土を守った。その首都ストックホルムは大小あわせて14の島からなる。ボートで1時間ほど廻る機会があったが、美しい緑のなかに、ゆったりとした人生がうかがえる。ホテルから10分くらいで、中世の面影を残したガムラ・スタン (旧市街) とよばれる一郭がある。石畳の狭い道をはさんでレストラン、カフェテリア、みやげもの店などが並び、地区の中央には王宮、いくつもの教会、議事堂、広場など、そして午後になるといろいろなストリートアーティストが歌ったり、奏でたり、パントマイムを披露したり、とにかく楽しい。ホテルからガムラ・スタンとは反対の方向に10分ほど、木立に囲まれた教会のわきの狭い坂を登った静かな住宅街にSISのビルがある。会議場はその地下2階であるが、建物が斜面に建っているため、横に出れば地上である。

31st. TC35week

今回、出席したのは次の8名である。

縦山 巖 (TC35国内委員会委員長、日本化工塗料)

筒井晃一 (SC9国内委員会委員長、日本ペイント)

田中文之 (A&D)

馬場護郎 (村上色彩技術研究所)

須賀茂雄 (スガ試験機)

豊田常彦 (TC35国内委員会事務局、日塗工)

井関匠三 (日塗検)

吉田豊彦 (日塗検)

会議の内容についてはこの紙面では伝えきれないが、印象に残っていることを記しておく。

TC35

長年委員長を務め、日本びいきでもあった Prof. Banckenが2002年に辞任されてから、後任がまだ決まっていない。Mr. E. Aanensenが仮議長をつとめた。

SC9 (塗料一般試験方法)

新委員長がMr. David Heath (イギリス) に決定した。WG16 (粉体塗料)、WG21 (可燃物試験方法) の2つのWGはそれぞれ担当分野のISOが整備できたので、解散する。

SC2 (顔料)

定刻になっても出席者はコンビナー、セクレタリーと (筆者を含めて) 0-メンバー2人だけ。着色力 (ISO787-26, JIS K 5101-3-4) の第2次NWIに着手する、見直し12件を確認する、というだけに止まった。

Delegates meeting (代表者会議)

TC35議長代行の秘書からISO技術管理評議会で新しく決定された事項 (国際標準化の迅速化など) について説明があった。

WG22 (色、光沢)

このWGがTC35weekに開かれるのは3年ぶりである。convenor はDr. Hempelmannにかわった。測色に関するISOの再編が予定よりも遅れていることに関わり強い意見が出た。

“ゴニオアパレントな色の測色” について馬場主査か

らパワーポイントによって詳しく説明し、NWI（新規提案）として提案することが認められた。これはマルチカラーというプロジェクト名で日塗検が事務局として開発してきたもので、早急に提案の手續きにはいる。

DIS 6504-3（隠蔽力測定法）への日本のコメントが抜けているのを修正した。

WG23（機械的性質）

Convenorは女性のDr. P. Herrmannで熱心だが、かなり強引なところもある。しかし、良く話せば理解してくれるようになった。

- ①日本から現行のクロスカット図版の不具合点（記述内容と図版との相違）を指摘し、新しいCG図版に切り替えるように提案した。しかし、協議の結果、図版は変えないで記述内容を変えDISにすることになった。
- ②日本提案のT-bend試験法は、Convenorの意向でEUより大幅修正されたが、日本の意見も採り入れるように強く申し入れ、結局再修正の後CDとする。
- ③次期NWIに繋がるFDM（減衰振子法）によるTg点測定法について技術情報を日本から提供した。

WG25（環境試験）

Convenorは英国紳士のMr. C. Watsonで判断は極めて緻密で公平であり日本に対しては好意的である。WD（腐食試験時の塗膜の傷つけ方法—ガイドライン）日本提案は一部英国からの厚膜の要望をいれCDに進めることが決定した。

WG26（性能試験）

Convenorを20数年勤められたDr. D. Kocottが引退することになり、今後はMr. RiedlとMr. Pauschが議長を務めることになる。

- ①CD4628-6（テープ法による白亜化試験）で日本提案によるCG画像が採用されることになり、その出所文献に日塗検の「塗膜の評価基準」が引用されることになった。DISとする。
- ②FDIS2810（天然暴露試験）間もなくISOになる。

WG28（塗膜と塗液の性状）

南アの若い女性がConvenorでテーマがWG23と錯綜しWG23に押されがち。

- ①DIS9514（反応性塗液のPot-life）各国からの意見に関して集中審議した。日本からの重要な技術上の意見は認められた。意見を考慮してFDISとする。
- ②ISO2884-1（Cone and plate viscometer）は5年見直して継続して使用することが確認された。

Welcome party

16日18時からScandinavian Colour Institute(SCI)の招待で開かれた。ここはNCS表色系の生まれた所である。NCS表色系について見学と説明を受けてから、スウェーデン料理でのディナーを頂いた。若い5人のグループによるアカペラのコーラスをききながら、楽しい時を過ごした。

TC35における日本

日本がTC35のP-メンバーになって国際会議に初参加したのは1987年、第16回（ブダペスト）のことであった。10数年の時を経て、日本はTC35の中でも活発に活動している国の一つになったと言えるだろう。しかしISOはなんと言ってもまだヨーロッパ中心ではあるし、会議の運営にはconvenorやsecretaryの考え方が強く出たりして、関係者が苦勞しているのも事実である。今回、韓国から2名の出席があった。これからの活動を期待したい。

おわりに

短い期間だったが、さわやかで豊かな自然の白夜のストックホルム、その歴史、文化の一端にもふれることができた。それにもまして、ISOでの日本の活動が進み、そのいくつかは実を結ぶことができたことは喜びである。そのために努力してこられた委員の方々、それを支えてくださっている関係者の方々に感謝と敬意を捧げる。



写真2 SISの前で 須賀、馬場、吉田、筒井